

梅花女子大学心理こども学部紀要  
第5号（2015年3月20日刊）抜刷

関西児童文化史研究  
—橋詰せみ郎の生涯と仕事—

畠 山 兆 子

# 関西児童文化史研究 ―橋詰せみ郎の生涯と仕事―

畠山兆子

## A History of Child's Cultural Movements in Kansai District : The Life and the Works of Hashizume Semiro (1871-1934)

HATAKEYAMA Choko

### 一 はじめに

1932(昭和7)年9月18日に設立された「大阪童話教育研究会」は、関西児童文化の黄金期を作り出した団体であった。会長に大阪府女子専門学校長、平林治徳をいただき、顧問には、巖谷小波等、関東在住の著名人もいたが、関西の小学校校長、師範学校長、大学教授等の名前が連なっていた。

同会が大きな成果を挙げ得た主要な要因は、基礎となる人材に教育者をくわえたことであった。子どもと直接かかわる人々の意識の向上が、児童文化の質的向上につながるの認識は、教師や母親への働きかけとなり、一中略一教育の場に口演童話を持ちこみ、研究の対象としようという意図は時流を先取りするもので、やがて話術の研究は、文部省の方針に沿うものとして小学校教員の関心の的となったからである。<sup>(注1)</sup>

話術への関心は、小学校教員に止まらず幼稚園保母にも広がっていた。1926(大正15)年4月22日に制定された「幼稚園令」は、幼稚園保育を盛んにし、1931(昭和6)年には、全国に1620の幼稚園が存在した。<sup>(注2)</sup>「幼稚園令」の保育項目「談話」に注目した保母たちが、保育に役立つお話と実演技術を求めるようになったからである。

同会設立以前の関西は、どのような状況にあったのか。加藤理の「大阪の誕生期「児童文化」活動と後藤牧星」<sup>(注3)</sup>は、芸術的児童文化に関わった人々の仕事を明らかにしており、貴重な示唆を受けた。後藤牧星が設立した児童文化協会付属緑幼稚園<sup>(注4)</sup>が、大正12年に存在していたとの指摘も興味深い。

当時の資料の中に、高尾亮雄、辻村又男、塚田喜太郎等とともに名前があがる人物に、毎日新聞社社員の橋詰せみ郎がいる。彼は「大阪自然幼稚園長」の肩書で、大阪童話教育研究会の顧問に名前を連ねているが、顧問25名中、幼稚園長の肩書を付けているのは彼のみである。もっとも、東京女子高等師範学校教授の倉橋惣三は、付属幼稚園長であり幼児教育の権威である。また、久留島武彦は早蕨幼稚園(1910年設立)、岸辺福雄は東洋幼稚園(1903年設立)の園長であったが、彼らは巖谷小波とともに著名な口演童話家として賛同していた。なお、橋詰せみ郎の肩書は、「大阪自然幼稚園長」となっているが、当初は「大阪家なき幼稚園」と命名されていた。経済効率が声高に叫ばれ、文化軽視の時代に、子どもの幸せを願って活躍した橋詰せみ郎の生涯と仕事を顧みて検討することの意味は大きいと考えている。

## 二 橋詰せみ郎の生涯と仕事

### (一) 子ども時代

橋詰せみ郎とは、どのような人物であったのか。山崎千恵子による「橋詰せみ郎とその仕事」<sup>(注5)</sup>と水野浩志「『家なき幼稚園の主張と実際』解説」<sup>(注6)</sup>等を手掛かりに考えたい。

橋詰せみ郎、本名良一は、1871(明治4)年8月19日に、兵庫県川辺郡尼崎(現尼崎市)の没落士族の家に長男として生まれた。弟がいる。2歳で西宮市へ引っ越した後、市内を点々とする。月刊誌「愛と美」<sup>(注7)</sup>に掲載された「私の悪太郎時代」<sup>(注8)</sup>や「私の幼な物語」<sup>(注9)</sup>には、「本町」「六湛寺」「廣田神社」「久保町」「戎」等、西宮市の地名が多く出てくる。数え年の6歳で小学校に入学し、8歳で「濱の学校へ変わった」<sup>(注10)</sup>とある。

この頃、「英語のウエヴスターのスペリングブックを持って習ひかけて居ました。一中略一其の書物を買つて貰つたことは慥かですが、お金を拂つて貰はれなくて長いこと苦し居たことを今におき思ひ出します。」<sup>(注11)</sup>とあり、明治10年代初め、貧困に苦しんでいた橋詰家が、息子の教育に立身出世への希望を託していたことが窺われる。池田家なき幼稚園に、「アレキサンダー女史(長くウイルミナ女学校校長を勤められた米国婦人)を頼んで、毎週遊びに来て頂いて、幼児たちに話しを聞かせて一後略一」<sup>(注12)</sup>は、この体験からの発案と考えられる。

なお、毎日新聞社事業部長時代には、アメリカの進歩主義教育者パーカーズト女子の全国講演を斡旋し、1924(大正13)年4月21日、池田家なき幼稚園への来訪をうけている。<sup>(注13)</sup>

1885(明治18)年、14歳で小学校を卒業した頃は、「與古道町」<sup>(注14)</sup>に住んでおり、母親のたつての希望で、西宮郡役所学務課長であった有馬八郎の紹介を得て、「灘、住吉小学校授業生」として初めて教壇に立った。月給は2円50銭であった。「小さい先生」と子どもたちからかわれ実家に逃げ帰るが、間もなく西新田で再び見習い先生となる。<sup>(注15)</sup>見習い先生の期間は不明である。父親の失踪が関わるのか、その後大阪の父方の叔父に引き取られ、勉学することになる。<sup>(注16)</sup>1895(明治28)年、24歳で神戸師範学校を卒業している。

### (二) 教員時代

山崎千恵子作成の配布資料「橋詰せみ郎(良一)略年譜」<sup>(注17)</sup>は、教員時代について、次のように報告している。

- 1895(明治28) 24歳 神戸師範学校卒業 大阪市安治川小学校訓導となる。
- 1896(明治29) 25歳 大阪市西区第二高等小学校訓導(8年間)
- 1897(明治30) 26歳 関西女学校 秦西学館教師囑託(2年間)
- 1905(明治38) 34歳 神戸税関囑託
- 1906(明治39) 35歳 大阪市教育会主事となる、会誌編集に従事

橋詰良一は、当時の大阪教育界で頭角を現していた。

当時の小学校教育界は活気に満ち、技術的には未熟でも青雲の志を持つ青年教員たちが集まり、従来の封建的慣習を打破し、新しい創造的意欲と希望に燃えて、子どもたちに体当たりで教育実践を行っていた。彼はその中でも大阪市の小学校教育界の若手五人男の一人として注目を浴びた。彼は生来感激性に富み、義理人情に厚く、世話好きで、子どものような純情さを失わず、興味の赴くところ、何ごとにも徹底的に追及してやまない情熱家であり、また、

努力家でもあった。(注18)

1901(明治34)年、高等小学校訓導時代に、最初の出版物と考えられる『新案 色彩遊戯』(宝文館)を出版する。「私の幼な物語」に、10歳頃の思い出として次の記述がある。

其の家の父さんが提灯屋さんで、遊びに行くとき直ぐいろ／＼の繪具をイヂらせて呉れるのが嬉しくて毎度遊びに行きました。一中略一其の父さんが黄色の磨り墨をくださったので一中略一其の當時私は色繪をかこうとしまして色々工夫をしていましたが、一中略一胃散のアキ罐の蓋を硯に代用して黄墨を磨りつけて居ますと、不思議にも黄色が出ずに、その罐の錆と黄色とが混つて、薄緑の色が出て来ましたので一中略一ほんとうに私は其の當時から色が好きで、赤や、青や、黄や、紫や、緑を取り混ぜて色々の繪を描くことに熱中したものでしたが、一後略一(注19)

幼少時から絵と絵の具に関心が強かったと述べている。『新案 色彩遊戯』は未見であるが、図画教育に関わる出版物ではなかったろうか。

1906(明治39)年、大阪毎日新聞社社長、本山彦一(1903年社長就任)が、大阪市教育会理事長に推挙されるにともない、「大阪市教育会報」編纂に従事するため主事に抜擢される。主事の期間は短い、「明治四十年の京阪神三市連合保育会の席上で、郊外保育に関して話題にのぼった「子供博覧会」は、彼の企画によるものだった。」(注20)とある。「京阪神三市連合保育会」とは、フレーベルの保育思想を根本から研究し、その思想に忠実な保育を行おうと努力していた団体である。また、「子供博覧会」は、明治39年5月に、東京上野で開催された日本で最初の子ども博覧会で、京都(注21)でも開催された。

## (二)毎日新聞社時代

### 1 社員としての仕事

1906(明治39)年11月20日、社長の本山彦一に抜擢され、大阪毎日新聞社に教育記者として入社し、通信部(教育担当)に配属される。

教育者としての見識と経験が豊富なうえに、教育界に知己も多く、よい材料とよい記事を絶えず提供したため、大阪毎日新聞は大阪の教育界に重視され、一中略一彼は独創的なアイデアマンであると同時に、精力的な実行力兼ね備えた人で、次々と新しい事業を計画して見事にそれを成功させていった。大阪毎日新聞主催の「学生見学船」や「婦人社会見学団」のアイデアもすべて彼の発案一後略一朝日はその対抗策を練るのが大変だったと一後略一(注22)

この時期は、社長本山彦一の賛同のもとで、毎日新聞社を背景に社会・婦人啓蒙活動に邁進した期間であった。「橋詰せみ郎(良一)略年譜」では、在職期間を次のように報告している。

1906(明治39) 35歳 11月20日、大阪毎日新聞社に入社、通信部(教育を担当)。阪神打出、南海浜寺に海水浴場、海泳練習所を創設、理事として計画に関与

1909(明治42) 38歳 内国通信部兼、連絡部員となる

1913(大正02) 42歳 大阪こども研究会成立、幹事となる

1914(大正03) 43歳 社会部兼務となる。宝塚少女歌劇慈善歌劇会催す

1916(大正05) 44歳 婦人社会見学団を組織

1917(大正06) 45歳 社会部副部長および内国通信部員

- 1918(大正07) 46歳 内国通信副部長、地方課長となる  
1919(大正08) 47歳 『家庭と婦人』を出版  
1920(大正09) 48歳 9月1日事業部長となる。11月2日洋行員を命じらせる。『生活改造資料』編纂、出版する  
1921(大正10) 49歳 神戸出帆渡欧の途。シンガポールにて羅病(3月1日)帰社、引き続き事業部長として手腕を奮う(7月8日)  
1922(大正11) 50歳 家なき幼稚園創立  
1925(大正14) 54歳 大大阪記念博覧会理事、特設館および娯楽館委員長  
1926(大正15) 55歳 年齢満期非職となり事業部相談役となる。京都市児博覧会、童謡盆踊り「親孝行踊り」を発表、実演

1908(明治41)年、9千号発行の記念事業として、教育的なフィルムを携帯して関西各地を巡回する「通俗教育活動寫真班」が組織される。1910(明治43)年には映写会と同時に「通俗講演會」を催し、活動寫真と相待つて力を盡すこととなり、内國通信部兼社會部員橋詰せみ郎(良一)氏専らその衛に當り」(注23)と、事業を一手に引き受けていたことが記されている。

また、1911(明治44)年には1万号記念事業として、本山社長を理事長に「財団法人大阪毎日新聞慈善團」が設立された。(注24)

他の慈善団体の事業を援助し、一中略一毎年孤児游泳會に臨時的に防疫を應援し、大正十一年更に本社に於て盲人文化の爲めに率先實現せる盲人教科書刊行會の事業を後援して資金を貸與し朝鮮婦人救済會を援助する一後略一(注25)

橋詰良一は、教育経験を生かした記事を執筆し、斬新な提言を行い実行に移すとともに、盲人用教科書の刊行や盲教育令発布のために尽力した。『大阪毎日新聞社史』「附録」の「本社寄付金支出明細調査(自大正五年十一月至大正十四年二月)」には、大正11年から毎年「家なき幼稚園補助 三〇〇圓」とあり、彼の事業に毎日新聞社の金銭的援助があったことが分かる。

幹事となった「大阪子ども研究会」について、加藤理は次のような指摘を行っている。

大阪子ども研究会は、一九一三年(大正二)年三月大阪三越内に結成されている。三越は大量生産・大量消費の社会が到来しつつあった当時、新たに開拓する顧客のターゲットとして、都市中間階級の子どもと家庭生活に狙いを定めていく。一中略一東京で結成された児童用品研究会の大阪版が大阪子ども研究会だった一中略一子ども研究を真摯に行うことで社会への貢献を行うことと子ども研究によって大阪三越の企業イメージのアップを図ることの他に、児童博覧会の開催に関連して大阪を市場として子どもを家庭生活をマーケットの対象にしていくための戦略上の必要性から結成されたことは明らかである。(注26)

子どもを取り巻くすべてを研究対象にした大阪子ども研究会は、教育者に加え、「実際に子を育てた経験家と子供研究の熱心家とが各方面から集まつて色々に調べる」(注27)必要があると「趣意書」で指摘し、「巻末に伊賀駒吉郎、橋詰良一、大村忠三郎、辻村又男、柳瀬実次郎、桜根孝之進、そして高尾亮雄の幹事七名の氏名が明記」されている。研究会と銘打った啓蒙活動を通して社会の意識変革を進める活動は、企業の利潤追求を露わにしないで目的を達する緩やかな戦略といえる。それは橋詰せみ郎が提案し、実行に関与した毎日新聞社の事業そのものでもあった。1915(大正4)年4月22日に開かれた同会の「父母の会」で、橋詰せみ郎は、「子供と蓄音機」について話している。(注28)また、1934(昭和9)年3月17日に開催された、大阪子ども研

究会主催「端午の節句に関する座談会」には、幹事として出席していた。(注29)

1916(大正5)年、橋詰せみ郎の「婦人の地位の向上と知識の進歩を助けねばならぬことを感じ」(注30)との進言を受け、婦人への啓蒙活動として「婦人社會見學団」が組織された。その活動を『大阪毎日新聞社史』は、「各種文化事業」において次のように報告している。

三、婦人社會見學 婦人の常識涵養の為に、社會各方面の實地見學をなすを目的とし、大正五年十月十日、大阪郵便局と同瓦斯會社を見學せしめたるが初まりにて、第一回の會員は四十八名にて家庭の主婦に限つたのであるが、次第に範圍を擴げ、七年十一月廿三日大阪公會堂に於いて其二周年記念會を開いた時は、八千の會員が集り、大阪空前の盛觀であつた一中略一婦人の知的啓發の意義ある事業となつた(注31)

橋詰せみ郎編『婦人社會見學寫眞帖』(注32)によって、その具体的成果を見ることができる。この企画が好評であったことは、1926(大正15)年6月に、第百回記念大会が開かれていることから明らかである。

1914年(大正3)年4月、宝塚少女歌劇が結成されるや、翌年12月11日から3日間、大阪北浜の帝国座で、毎日新聞社主催の「慈善歌劇會」を企画し、世に紹介している。(注33)1917(大正6)年には宝塚少女歌劇の脚本、「歌かるた」(箕面有馬電気軌道株式会社)を、1918(大正7)年には「石童丸」(同前)を執筆している。また、1923(大正12)年には『宝塚の少女歌劇』(新生堂書店)を出版しているが、ともにささやかな冊子だという。(注34)

『家庭と婦人』(長谷川書店)は、「大阪毎日新聞」に連載された「家庭生活への生活文化・生活技術的アドバイス集」(注35)を編纂したものである。また、1920(大正9)年4月20日から5月31日まで開催された「生活改造博覧會」では委員長を務め、橋詰せみ郎編纂『生活改造資料』(注36)を出版している。

1920(大正9)年、重役直属の事業部が新設される。「愛と美」に「此事業部は本山前社長が創案でいはゞ橋詰せみ郎氏のために創設されたものとさへいはれたくらゐだった。」(注37)との記事がある。『大阪毎日新聞社史』は、「大正九年本社が事業部を新設して、各種の文化事業活動寫眞及び運動競技等を管理せしめたことは一中略一爾後各種の事業秩序的に經營され、著しき發達を見るに至った。」(注38)として、「常設的事业」を挙げている中に「浜寺海水浴場並に天幕村」「浜寺水練學校」がある。「不定期的催し物」には、「婦人見學、婦人ピクニック會、姉様學校、文科大學、活動寫眞研究會(以上毎月または隔月開催)一中略一児童文藝研究會、盲人文化協會、一中略一(以上時々開催)一中略一児童文藝研究會のため、機関雜誌を發行して其の發展をはかつてゐる」(注39)とあり、本山彦一社長の「初期に於て行ひたる知識の普及、體育の奨励等」(注40)には、橋詰せみ郎の発案、実施の事業が多いことが分かる。なお、児童文芸研究会の開催と機関誌發行については不明である。

1921(大正10)年、毎日新聞社は世界各国へ社員を巡遊及び視察に送り出す。「欧米諸國巡遊」(注41)に橋詰良一の名前がある。ところが、「それは、大正十年の夏でした。外遊途上からの病氣をもつて帰つてから凡そ三カ月ばかり家に引籠つて居る間に」(注42)「家なき幼稚園」の構想を膨らませたという。(注43)

加藤理は、後藤牧星の新聞記者の時期を、「大正八年と九年、もしくは十年の初めくらいまでということになる。一中略一牧星が関わった新聞社は大阪毎日新聞の可能性が高い。」(注44)



畠山 兆子

としており、当然面識はあったであろうが関わりはなかったようである。

1925 (大正14)年、1万5千号を発行した毎日新聞社は、3月15日から4月30日まで記念行事、大大阪記念博覧会を開催する。理事と特設館および娯楽館の委員長を務めた。「娯楽館の活動写真、芸妓手踊、落語、喜劇、文楽座人形浄瑠璃、西洋音楽、長唄、各地名物俚謡、ダンス、雅楽、箏曲、琵琶等各種の余興から奏楽堂の音楽隊の演奏を無料で公開し」(注45)娯楽館の企画は、彼の目配りと守備範囲の広さを示すものである。

1926 (大正15)年1月13日から2月14日まで、照宮成子内親王殿下の誕生を祝して、東京で開催された「皇孫御誕生記念こども博覧会」は、「本館にはおもちゃ館、きもの館、教育館、運動館、こども部屋、母の家、栄養館、廉賣館の八館を設け、別館を記念館となし」(注46)好評を博した。『皇孫誕生記念こども博覧会記念写真帖』(注47)が出版されている。7月1日から8月にかけて京都岡崎公園でも同様に開催されたが、「本山社長の創案により児童創作館が附設し、關西各府縣小學校および台湾、朝鮮、満洲の各學校児童の代表的童謡、自由畫、習字、手工品、手藝品を集め」(注48)た展示が追加された。右写真は入口絵葉書。



橋詰せみ郎の発案による企画であろう。また、彼の考案による「童謡盆踊り」も発表され、普及運動が展開された。

## 2 家なき幼稚園の設立

1922 (大正11)年5月、本山彦一の賛同を得て、最初の家なき幼稚園を池田市室町に設立する。園歌「家なき幼稚園の謡」の作詞は、本山彦一であった。(注49)呉服神社の森と絵馬堂を使った、園舎を持たない野外保育は、保育料が1ヵ月3円で、意識的な有産階級の子どもでなければ、入園できる金額ではなかった。

この年、『宝塚の歌劇少女』(新正堂書店 未確認)、『子供のための叢書 子供と新聞研究』(新正堂書店 未確認)、『天然の恩物と其の応用』(家なき幼稚園 未確認)を刊行している。続いて1924 (大正13)年2月、宝塚家なき幼稚園、5月には、十三家なき幼稚園、6月には、箕面家なき幼稚園(現箕面北公園)、9月には、大阪家なき幼稚園を設立し、都心から自動車幼児を郊外に連れ出し保育をするため、六十余ヶ所の集合場所が設けられた。なお、自動車免税問題で国の認可が必要となり、1929 (昭和4)年10月「大阪自然幼稚園」と改称する。1924 (大正13)年12月には、雲雀丘家なき幼稚園、1925 (大正14)年2月には、千里山家なき幼稚園が設立され、7園すべてがそろった。

倉橋惣三が、『家なき幼稚園を訪ふ』を「幼児の教育」(注50)に執筆し、続いて志垣寛が「家なき幼稚園を訪ふ」を「教育の世紀」(注51)に発表して、その存在が幼児教育界に知られるようになった。1928 (昭和3)年7月には『家なき幼稚園の主張と実際』を出版して、その理念と実践を世に問うている。

### (三) 毎日新聞社退職後

#### 1 幼稚園からの文化活動

幼稚園から社会へ波及することを意図した啓蒙活動として、「その精神（児童愛—引用者）によつて私の子供の國は子供のための子供の國である上に大人のための子供の國であります。又、社会のための子供の國であります。」<sup>(注52)</sup>と述べ、池田室町での「子供夜櫻會」が、「北撰の春をにぎはす行事として子供にも大人にも喜ばれるようになって来ました。」<sup>(注53)</sup>と、地域に受け入れられる行事になったことを報告している。また、「子供盆踊り會」では、「盆踊りといふ郷土舞踊を日本の郷土藝術界から葬り去つてしまつたのは今の大人の過誤であります。」<sup>(注54)</sup>と、盆踊りの衰退を危惧し、地域交流の行事として復活することを願っている。

私はその復興を希望するため子供の世界から更生を思ひ立ちまして童踊を盆踊りにして—中略—それを私の園では他の童踊舞踊と同じく母達とも一緒に踊らせて幾年を過ぎて参りました。—中略—何時かはほんとの盆踊りに迄歸つて行く機會があると信じます。<sup>(注55)</sup>

地域ぐるみの文化振興を考えた行事による啓蒙活動の展開は、社員時代の延長である。また、「私は日本の教育が郷土藝術や邦楽を餘に疎んじて居ることを痛憤します。」<sup>(注56)</sup>と述べ、邦楽を学校教育に取り入れる運動の先駆けとして、園児に三弦と親しむ機会を与え、その普及に取り組んでいると述べている。伝統的日本文化への再評価は、やがて日本がたどる帝国主義への道筋を考えれば、穏やかなまなざしが智識層に賛同者を集めたことは想像に難くない。

#### 2 月刊誌「愛と美」

1925（大正14）年6月1日、大阪におけるラジオの仮放送が開始され、大阪中央放送局（JOBK）が開局、子どもの文化は転換期を迎えた。「橋詰せみ郎（良一）略年譜」は、退職後から死去までの活動を次のように報告している。

- 1927（昭和02）56歳 「愛と美」創刊。童心茶話会創設会員となる。関西教育博覧会に尽力する
- 1928（昭和03）57歳 『家なき幼稚園の主張と実際』を出版。関西こども聯盟成立
- 1930（昭和05）59歳 大毎のお伽会発足。むすめ童話会発足。人形浄瑠璃教育会、発起人となる
- 1931（昭和06）60歳 第1回自然物の子供手細工展覧会。女流人形浄瑠璃教育会、発起人となる
- 1932（昭和07）61歳 大阪童話教育研究会成立顧問となる。第2回自然物の子供手細工展覧会。全国幼児教育団体連盟成立発起人となり『愛と美』を機関紙とする
- 1933（昭和08）62歳 大阪自然保母学校を開校
- 1934（昭和09）62歳 6月30日 死去。清子夫人との間に4男5女

退社後の活動は、「愛と美」掲載記事で知ることができる。主宰者橋詰せみ郎は、発行所「姉様学校」について「女性の團體で、それが、餘り他の方面ではいつて呉れて居ない「児童愛」の理解のため、また一面には「生活美化」を高唱するため、いろ／＼の會に誘導するのを異彩として、兎も角も大阪自動車幼稚園創立の時代から始め掛けたものです」<sup>(注57)</sup>と説明している。創刊号には、「入會＝誰でも出来ます。今（註57）は各女學校の卒業生を中心に、各家庭の母さ



またちまでが五百人ばかり加入して居られます—中略—左のやうな催が重なものです。(一) 子供に関する社会設備及幼稚園等の見學、(二) 子供と共に遊ぶ會、(三) 子供藝術の習得、(四) 児童學に関する講座、(五) 各種講演會等—中略— 一、『愛と美』といふ児童神性の宣傳の小雑誌を發行して居ります。—中略—十銭の小雑誌です。』<sup>(注58)</sup>との巻末広告がある。

「童心茶話会」とは、1927(昭和2)年4月29日、東京から蘆谷重常、内山憲堂、櫻葉勇を迎えた歓迎会の席上で、橋詰せみ郎、高尾亮雄、尾関岩二等の發議で發会した、関西の児童文化関係者のサロンともいべき団体で、姉様学校から幸田花枝が幹事となっている。<sup>(注59)</sup> 童心茶話会が啓蒙、親睦団体であったのに対して、関西子ども聯盟が実践活動を行う団体であったためか、理事等に橋詰せみ郎の名前は出てこない。なお、1930(昭和05)年1月、大阪毎日新聞社は、大毎童話班を結成し、子どもの雑誌「大毎コドモ」と付録「家庭と健康」を、学校掲示資料として「大毎コドモ画報」を發行している。

1930(昭和5)年12月2日の「子供の時間」(JOBK)に、大阪自然幼稚園の園児が、幼児劇「木の葉の兵隊さん」を放送した。<sup>(注60)</sup> 翌年7月31日には、箕面自然幼稚園、森垣操子保母と共に「自然物手技の放送」の放送を行なっている。<sup>(注61)</sup>

組織作りには晩年まで積極的で、1932(昭和7)年2月号の「愛と美」に、発起人橋詰せみ郎の名で「全國私立幼児教育團體聯盟」設立を呼びかける。<sup>(注62)</sup> 続いて、3月号<sup>(注63)</sup>では、「発起人大阪毎日新聞相談役／自然幼稚園長、橋詰せみ郎」で、さらに5月号では組織の名称が変更され「全國幼児教育團體聯盟」の設立に就いて<sup>(注64)</sup>を掲載、11月号に「全國幼児教育團體聯盟」が成立しました<sup>(注65)</sup>の報告が掲載されている。さらに、1933(昭和8)年3月号の「愛と美」は、「大阪自然保母學校の創設號」で、保母養成校を設立しているのである。

大阪童話教育研究会設立の立役者、足立勤は、童心茶話会の幹事であり橋詰せみ郎と付き合いがあった。大阪毎日新聞社の全面的支援は、1933(昭和8)年3月5日発行の「大毎コドモ」付録に、写真入り振り付け解説付き会歌の楽譜を付けたことから明らかである。さらに、1934(昭和8)年1月の機関紙「子供と語る」創刊までは、「大毎コドモ」の付録「家庭と健康」が、機関紙の代わりを務めた。理事に大阪毎日新聞社童話班、須古清の名前もある。足立勤と須古清は同会の設立に当たり下相談をしている。権威を持たせるための人選や配慮、教育関係者への働きかけ、研究と実践を結びつけ、主旨の宣伝のための機関紙の発行など、毎日新聞社時代に培った経験を生かした助言や手助けを、橋詰せみ郎から得たのではなからうか。

1932(昭和7)年12月30日、顧問であった本山彦一が死去する。<sup>(注66)</sup> 精神的、経済的に大きな支援者を失なった。1934(昭和9)年4月の児童芸術研究所「設立趣意書」賛助員のなかに、橋詰せみ郎の名があるが、「愛と美」7月号の「編輯室だより」には、「今月号はせみ郎先生がご病氣の爲に経験の浅い私たちが」<sup>(注67)</sup>とあり、6月30日、62歳で病没した。

### 三 おわりに

関西で育まれた、子どもの文化の変遷への関心から、橋詰せみ郎の生涯と仕事をたどることで、彼が生きた時代の子どもの文化を明らかにしようと試みた。その結果、彼が見詰めていたのが、子どもに関わるものだけではなくたことを改めて確認させられた。

橋詰せみ郎が関わった啓蒙活動は、毎日新聞社の権威を背景に、その宣伝力に於いて圧倒的であった。それは、足立勤が大阪中央放送局を背景に持っていたのと同様である。関西児童文

化の地盤形成に、経営者として先見の明があった山本彦一社長が、企画実行者としての橋詰良一を得て、それが時代の趨勢であったとしても、女性の意識変革に関わる啓蒙教育活動を展開したことが、関西の地盤形成に大きく関わっていると考えられるからである。企業人として、子どもの社会だけを見ているのではなく、子どもを取り巻く大人の社会を視野に入れた意識変革を目指していたからである。山本彦一も橋詰せみ郎も、子どもの頃に父親を亡くしており、子どもへの関心が高かった。そして何よりも橋詰せみ郎は、本質的に教育者であった。しかも、大阪毎日新聞社は、宿敵企業の朝日新聞社に「子どもは別」と人材交流を行い、協力して行事を行なわせる力を持っていた。「子どものため」が大義名分として通用した時代であった。

当然のことではあるが、大人の意識改革は、子どもが住みやすい社会に大きく関わっている。童心主義の甘さはあるにしても、退社後の家なき幼稚園を拠点に行われた「愛と美」の活動の意味は大きい。家なき幼稚園は、園の教育方針が斬新なだけでなく、趣旨に賛同する保母の育成を図り、子どもたちの両親に働きかけ、良好な環境作りを目指した社会活動を積極的に展開していたからである。水野浩志は、「我が国の伝統的な形式主義化した幼稚園教育界に革新的な息吹を吹き込んだその功績は、高く評価されるであろう」<sup>(注68)</sup>としながら、「橋詰の死とともに「家なき幼稚園」が消滅してしまったということは、大正デモクラシーの終焉という時代背景や、世間の無理解や経営難という諸要因もあったであろうが、この「家なき幼稚園」の運動そのものにも限界があったというべきであろう。」<sup>(注69)</sup>との厳しい評価をしている。毎日新聞社を退社し、山本彦一という庇護者を失い、橋詰せみ郎の悪戦苦闘が深まる。豊かな文化を育むためには、思い入れのある有能な人材とそれを受け入れる経済的保障がいることを、改めて感じさせられた。具体的な検討は、月刊誌「愛と美」の詳細な検討と共に、今後の課題としたい。

注1 畠山兆子『忘れられた大阪の児童文化』大日本図書 1992年5月 197～198頁

注2 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに昭和出版 1977年 820～821頁

注3 「大阪国際児童文学館紀要」第22号 財団法人大阪国際児童文学館 2010年

注4 注3に同じ。加藤理「大阪の誕生期「児童文化」活動と後藤牧星」28頁

注5 山崎千恵子編『橋詰せみ郎エッセイ集—「愛と美」誌より—』関西児童文化史研究会 関西児童文化史叢書・5 1990年10月

注6 水野浩志「「家なき幼稚園の主張と実際」解説」『大正・昭和保育文献集』第五巻 昭和53年3月

注7 1927(昭和2)年1月創刊、1934(昭和9)年、第8巻第92号で終刊となる。

注8 橋詰せみ郎「私の悪太郎時代」(一)～(十七)「愛と美」3巻3月号～4巻5月号 昭和4年2月～昭和5年5月

注9 橋詰せみ郎「私の幼な物語」(一)～(一〇)「愛と美」第5巻7月号、9月号、1月号、第6巻1月号、3月号、5月号、8月号、第7巻2月号、6月号、11月号 昭和6年7月～昭和8年11月

注10 「私の幼な物語(四)」第6巻1月号 46頁

注11 「私の幼な物語(五)」第6巻3月号 52頁

注12 橋詰せみ郎「英語は幼児の時から」『家なき幼稚園の主張と実際』東洋図書株式会社 昭

畠山 兆子

- 和3年7月171～173頁(『大正・昭和保育文献集』第5巻 昭和53年3月 日本らいぶらり収録)
- 注13 注6に同じ。注12に同じ。127～133頁
- 注14 「私の幼な物語(八)」第6巻5月号 48頁
- 注15 橋詰せみ郎「私の悪太郎時代(14)」『愛と美』第4巻1月号 77頁
- 注16 橋詰せみ郎「私の悪太郎時代(14)」『愛と美』第4巻5月号 76頁
- 注17 1988年6月14日、関西児童文化史研究会の配布資料 橋詰家に残された履歴書を参照して作成。
- 注18 注6に同じ。115頁
- 注19 「私の幼な物語(六)」第6巻5月号 51～52頁 橋詰せみ郎「巻頭言」『愛と美』第8巻1月号 15頁
- 注20 森上史朗『児童中心主義の保育』教育出版 1984年6月 133～124頁 145頁
- 注21 1906(明治39)年11月1日から11月25日まで、岡崎公園で京都市教育会が開催。
- 注22 注6に同じ。115～116頁
- 注23 『大阪毎日新聞五十年』大阪毎日新聞社 昭和7年3月 211頁
- 注24 『大阪毎日新聞社史』大阪毎日新聞社 大正14年4月63～68頁 「大毎慈善団・一隅に光を」『「毎日」の3世紀上』毎日新聞社 2002年2月 406～410頁
- 注25 注24に同じ。「附録 大阪毎日新聞慈善団の事業」63～68頁
- 注26 注3に同じ。5頁
- 注27 注3に同じ。6頁、堀田譲「高尾亮雄とその仕事」『大阪お伽芝居事始め』関西児童文化史叢書6 1991年8月 118～120頁
- 注28 堀田譲「高尾亮雄とその仕事」『大阪お伽芝居事始め』関西児童文化史叢書6 1991年8月 119頁
- 注29 大阪子ども研究会『端午』三越大阪支店 昭和9年4月
- 注30 『大阪毎日新聞五十年』大阪毎日新聞社 1937年 316頁
- 注31 『大阪毎日新聞社史』大阪毎日新聞社 大正14年4月 106～107頁
- 注32 梅津書院 1920年
- 注33 注6に同じ。115～116頁 「大毎慈善団・一隅に光を」『「毎日」の3世紀上』毎日新聞社2002年2月410～412頁
- 注34 注5に同じ。113～114頁
- 注35 注34に同じ
- 注36 婦女世界 大正9年7月(『近代日本生活文化基本文献集第Ⅱ大正・昭和編』10巻所収)
- 注37 水野新幸「本科に活映化を」『愛と美』第7巻9月号 17頁
- 注38 注31に同じ。148、164頁
- 注39 注31に同じ。151頁
- 注40 注31に同じ。105頁
- 注41 注31に同じ。89頁
- 注42 注12に同じ。25頁
- 注43 大阪市視学鈴木治太郎の考案による、貧しい家庭の幼児を無料で保育した大阪市露天保

育園(大正10年11月開設)の基本思想に、橋詰せみ郎が賛同した可能性は高い。記者「露天保育」「幼児の教育」第24巻5号 大正13年5月 173～174頁 松川ヨネ「大阪市露天保育」「幼児の教育」第25巻12号 大正14年12月 32～38頁

- 注44 注3に同じ。15頁
- 注45 「大大阪記念博覧會」注30に同じ。313頁
- 注46 注45に同じ。314頁。吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書 1992年9月 169頁
- 注47 大正15年5月5日 東京日日新聞社
- 注48 注23に同じ。314頁
- 注49 橋詰せみ郎「巻頭言 本山彦一翁の我が園に対する後援に感謝して」「愛と美」第6巻10月号 8～9頁
- 注50 第24巻1号 大正13年1月
- 注51 大正13年4月号(注12に同じ。収録 120～127頁)
- 注52 注12に同じ。「第二四 園より社會へ」272頁
- 注53 注12に同じ。272頁
- 注54 注12に同じ。274頁
- 注55 注54に同じ。
- 注56 注12に同じ。「第二五 郷土藝術と三絃の更生」300頁
- 注57 注12に同じ。「姉様學校と娘の教育」315頁
- 注58 注12に同じ。第1巻1月号 46頁
- 注59 注1に同じ。15～21頁
- 注60 「愛と美」第5巻1月号82頁
- 注61 「愛と美」第5巻10月号 35～38頁
- 注62 「愛と美」第6巻2月号 47頁
- 注63 「愛と美」第6巻3月号 55頁
- 注64 注63に同じ
- 注65 「愛と美」第6巻11月号
- 注66 「愛と美」第7巻2月号 45頁
- 注67 「愛と美」第8巻7月号 66頁
- 注68 注6に同じ。122頁
- 注69 注6に同じ。123頁